

上州七人嵐

佐々木味津三

佐々木味津三代表作選集第八卷

上州七人風

同光社版

佐々木味津三代表作選集 第八卷
上 州 七 人 嵐

¥ 200 (地方賣價)
(¥210)

昭和 28 年 1 月 20 日發行

著 者	佐々木味津三
發行者	磯部節治
印刷所	株式會社 常磐印刷所
製本所	柏谷製本工場

發行所 東京都千代田區 株式會社 同光社磯部書房
神田錦町 3-11

佐々木味津三
代表作選集第八卷

上州七人嵐

目次

上州七人嵐

五

頑固七人衆

七

破門

二七

江戸異變

吾

天晴れ省吾

六

本朝俠客列傳…………… 九

新門辰五郎…………… 一〇一

夕霧新三郎…………… 一三〇

會津の萬吉…………… 一五五

二本差の太三郎…………… 一五四

さうてい おかむら・ふじ

上州七人嵐

頑固七人衆

一

「お馬場口！ 固めはどうぢや」

「残らず手配いたしました。怪しい奴の影もござりませぬ」

「二番町口！ そつちはどうぢや」

「こちらも同様。異状ござりませぬ」

「ようし、ご苦勞く。胡散な奴徘徊したら、容赦なく引ッ捕へろといふお達しぢや。どん／＼繩にして構はぬぞ。——念のためぢや。誰ぞ屋敷の衆へもういち度お布令せい！」

「はッ。心得ました。——お布令でござるぞ。ご要心、ご要心！……」

「明けの七ツまでお出あるき禁物でござります！ 寄り合ひ、集會、人寄せがましいことも一切お禁じでござります！ ご要心！ 要心！……」

「お布令でござい！……。お達しでござい……」

あちらこちらと屋敷の通りを聲高に呼び歩く聲が、びやうびやうと不氣味にひびき渡つて、その物々しさ、知らず識らずに襟首までが寒くなるやうでした。

まだ早い。ほんの今、暮れたばかりなのです。

しかし、上州館林六萬石のお城下は、時ならぬこの非常警戒にしんくと静まり返つて、さながらにもう夜ふけのやうでした。

「氣味のわるい。まるで墓の中にでもゐるやうでござりまするな……。わたし、なんだかいやなところもちがしてならないけれど、おとうさま、大丈夫かしら……」

ぢいくと鳴いてゐる灯ざしの下で、お信乃は、ぢつと目をとぢ乍ら、長いことなにか祈つてゐたが、ふツくらとした白いその顔をふいにあげると、うるんだ睫毛をしばだき乍ら、不安さうに眩きました。

「おとうさまは、あの通りの癪癪持ちだから、今夜のお會議もきつと口論になるだらうと思ふけれど、大丈夫かしら、——な！ 省吾さま」

「……………」

「憎らしい！ なぜご返事して下さらないのでござります。もつと親身になつて、返事ぐらゐして

下さつたといふではありませぬか！」

「は？——いえ、なに、なるほど、分りました。返事でござりまするか。では、至極と活潑なところを致します。アハハハ……」

をかしな返事です。ほかには誰もゐないと思つたのに、ござりと部屋の隅の屏風のかげで、人の動いた氣勢がきこえたかと思ふと、突然、胴間聲を張りあげて、取つてつけたやうに、アハハと笑ひました。

誰でもない、笑ひ主は、今、名を呼ばれたその省吾でした。

少し人間が變つてゐるのです。——二十八だとも言ひ、三十だとも言ひ、さうかと思ふと二十二三だらうと言ふものもあつて、年までがつかまへどころもなくまぢくでしたが、いづれにしても五十六十の年寄りまでにはまだ間の遠い若者でした。

お信乃が癪癪持ちだからと言つたその父の武信宗義は、この館林藩にあつて、近習物頭をつとめ、旁々、唯心一刀流の分派である武信流小太刀の師範役でした。

省吾はその内弟子でした。

數ある門人の中でも、群を抜いて太刀筋がいゝところから、父の武信宗義が最も目をかけてゐた

のは、實にこの省吾なのでした。

そこへ行くと、武藝者の娘なぞといふものは、さすがに戀の太刀筋、孝行の位取りに狂ひがない。父のすきなご門人なら、わたしが好きになつても構はないだらうと、お信乃がまた大變孝行を勵んで、この省吾が誰よりも好きでした。

うすく、宗義もまた、それを氣づいたとみえて、今宵の祕密會議の留守中に、萬一なにか突發事が起きてはと、人知れぬ親心の氣を利かせ乍ら、特にこの省吾をえらんで、お信乃の護衛に當らせておいたのです。

しかし、變人と言ふものは、かういふ事にかけても、諸事少し變りすぎてゐて、齒がゆいくらゐです。その省吾がまたなんといふ勿體ないことをするのか、絶好の經節が目の前に坐つてゐるのに、番をしると申しましたからするのでござります、と言はぬばかりな顔をし乍ら、わざく屏風を立て、その向うにちよこなんと坐つたまゝ、ろくく顔ものぞかせないのでした。

それがお信乃にはじれツたかツたのです。くねりと膝をふりむけて、乳房を押へるやうにし乍ら、屏風のかげの見えない顔に、恨みがましく呼びかけました。

「意地のわるいお人な。あなたには、表の衆の物々しい呼び聲がきこえませぬか」

「實に手にとるごとし、いち／＼よくきこえてをります」

「をりましたら、もちツと親身になつて、ご心配して下さつてもいゝではありませんか」

「ご安心／＼。寄り合ひ、人寄せ、一切禁物ぢや、とのお布令でござりますゆゑ、お咎めに會うてはと、こゝにかうしてゐるのでござります」

「あんなことを！ その寄り合ひは、男と男、ご家中同志の寄り合ひをお止めになつたのではござりませぬか。ご舍弟様、お兄君様、ふた派に分れての大事なお會議でござりますゆゑ、ふた派の血氣なご藩士たちが、なにか騒動を起してはと、それを懸念してのお足止めでござります。あなたとわたしこそばへ寄るのは、違ふ寄り合ひではござりませぬか」

「違ふがごとくみえて違はざるが、即ち男女の掟、——アハハ……。君子はかうして番をせよと、古き物の本にござりますゆゑ、金原省吾、眷々服膺してゐるところでござります」

「憎らしい！ それにしたとて、こんなものは餘分でござります。とうさま、屏風を立てゝ番をせいと仰せでござりましたか」

「仰せになりませぬが、男女七歳にして席を同じうせず、かうしておけば、この屏風いち枚が至ツて微妙、同室せざるがごとく、したるがごとく、小太刀の極意もまたかくあらんかと存じまして、

省吾、折角稽古を勵んでゐるところでござります」

「なんて意地わるなお人でせう！ あゝ言へばかう言ツて、では、あなたさま、とうさまのご安否、お氣づかひではござりませぬか」

「……………」

「大殿様は、あの通りの御短氣、父も頑固の一徹者、誰が何と言はうとも、日頃の我を枉^まげるやうな父ではござりませぬ。枉^まげねば今宵のお會議も爭論になるは必定、爭論になりましたならば、お氣短な大殿様でござりますもの、お手討、切腹、父の身にどのやうな禍^{わざはひ}ひがふりかゝらぬとも限りませぬ。あなたさま、それが心配にはなりませぬか」

「……………」

「な！ 省吾さま！ どうなのでござります！ どうお思ひなのでござります！」

しかし省吾は、何をしてゐるのか、まるで啞^{おし}でした。

お信乃は齒がゆさうに、やきもきと身をくねらせました。親ひとり娘^{むすめ}ひとりのお信乃にしてみれば、また一途に父の身が心配になつたのは當り前なのです。會議々々と言ツてゐるその會議は、只の會議ではない。實に館林六萬石の運命^{うんめい}を決する重大會議なのです。幕運もう最後のひと押しの

土俵際まで追ひつめられた、元治元年の年の暮は、日毎に全國諸藩へ恐ろしいつむじ風を起して、江戸には由緒の深いこの館林六萬石も、勤王につくか、佐幕につくか、切端つまツた重大事に見舞はれました。

そこへ餘病のやうに勃發して來たのは、永らくの問題である藩の繼嗣、跡目の問題でした。當主の大殿年朝公は、名家秋元家の大主にふさはしいなくの賢君だツたが、不幸子がなかつたために、同じ徳川譜代の名家、遠州掛川の太田家からその第五子を養子に乞ひ請けて、ゆく／＼は跡目にも直さうといふつもりだツたところ、はしなくも運命がいたづらをして、その翌々年、ひよつくりと御妾腹に實子が生れました。

芽が二株出來たのです。名家の跡目に争ひの元となるべき新芽が二株咲いたとなツては、いつかはこれが問題にならないといふ筈はない。當然のやうに藩士もふた派に分れて、お實子が出來た以上は、養子を廢して御舍弟文松君を立てるべしといふもの、たとひ實子御誕生たりとも、一旦、跡目相續を約して御養子に迎へた以上は、あくまでも義を重んじてお兄君八十松君を立てるべしといふもの、六萬石をめぐる兩派の暗闘は、義理あるお兄君、血を分けたお舍弟おふたりの成長と共に、次第々々にふくれあがりました。

その御養子派を支へてゐる者は、誰あらうお信乃の父武信宗義を筆頭にして、以下高瀬順平、片岡佐吉郎、淺見林右衛門、安部藏人、宮島平右衛門、森谷惟輔の都合七人がその中心でした。

しかもこの七人が只者ではなかつた。律儀一徹、頑固無類、館林頑固七人衆と言はれた剛の者揃ひなのです。

この七人衆を向うに廻して、お實子派を牛耳つてゐたものは、僧英海でした。

世捨人の出家ではあつたが、この英海がまた常人ではない。才氣縱横、辛辣無類、秋元家菩提寺の住職といふ權をふるつて、巧に一黨を語らひ、その勢力また侮どるべからざる怪僧でした。

生憎なことにまた、義理あるお養子のお兄君と、血を分けたお實子のお舎弟とが、宿命的な仇同志のやうな間柄に分れて、兄君八十松君は、勤王の行くべき大道であるを主張し、御舎弟文松君は、佐幕の進むべき殉義であるを唱へて、兩々互ひに争ひつゞけてゐたのでした。

もつれにもつれて、つひに今宵の會議となつたその祕密會議が、たゞちに藩の運命を決する重大會議と言つたのは實にそのためだつたのでした。

もし、お養子派が勝を制して、義理ある八十松君がお跡目と決つたら、館林六萬石の藩議もまた決つて、勤王大道の輿論は燎原の火のごとく燃えあがつて來るに違ひないのです。